

生 命 産 業

富山県農村医学研究会 越 山 健 二

国会や県議会などで日本の農政がとりあげられ、為政者の人から農業は生命産業で重視しなければならないという力強い言葉がかえってくるのをよく耳にした。農業はここ30～40年余りの急速な経済発展の中で急速に衰退の傾向をたどり、富山県においても年々専業農家は減少し、農家戸数の大部分が第二種兼業農家に転じ、農家、農業離れに拍車をかけているのが実状で、生命産業といわれてもピンとこない人が多いのではないかと思われる。

ここで生命産業とは何なのか、為政者の生命産業というのは何を意味するのかを考えてみる必要があるように思う。

私は直接農業にたずさわった経験もなく、農業や農政について意見を述べる知識や素養も全くないが、ただ医師として、つね日頃生命とは、健康とは、健康管理、保健活動とは……等を考えるなかで感ずることは、生命の基本は大地であり、太陽であり、空気や水など森羅万象一切の自然である事に憶が及び、これらと切ってもきれない関係にあるのが農業であり農家、農村である。つまり生命と農業とは一体であり、農業は、まさに生命産業であるとの思いが強いのである。

地球がうまれてから約45億年、そこに生命が誕生してから約35億年ともいわれ、いま地球上には植物約1,000万種、動物約500万種が生息しているという。これ等の生物は天地自然のなかで生命現象を営むが、その生命エネルギーのもとには植物の光合成によって生産される葉緑素(糖質)である。又その葉緑素による糖質がすべての動物が生命を保つので

ある。植物は生産者、動物は消費者、それら動植物はやがて微生物によって土に還元されるのである。このサイクルは地球上に生命が誕生して以来不変のことである。

人間は脳(新皮質)を持つことにより、他の動物にみられない創造する能力をもち、火や道具を使い、くらしの環境を変えてきた。自然をたくみに利用し豊かさを求め、特有の文化を築きあげてきたのである。今日は科学技術の発展からハイテク社会の到来ともいわれ、人類が経験する第三の波の中にあるという。本年は筑波科学万博が華やかに開かれ、テクノトピアを唄いあげている。今後私共のくらしは、新素材、マイクロエレクトロニクス、新エネルギー、遺伝子工学、宇宙工学等の先端技術の開発によって大きな変革が予想されている。

このような中で生命や健康現象の衰弱が指摘され、不安や危機感が高まりつつあることも事実である。健康は、よく肉体的、精神的且つ社会的な3つの要素がうまく調和がとれた状態だといわれており、この視点からみると近代社会が造りあげた物質文明は便利で快適なくらしをもたらした反面、一方では多くの肉体的、精神的な不健康と、家庭や学校、職場など社会環境に多くの暗い影を残したことも否めないように思う。このような現象は物質にめぐまれた先進国ほど深刻のようである。

私共はいま物質文明に酔いしれ有限の地球の資源を消費し尽し、空気や水を汚染し、緑を枯葉にして、生態系を無視し、やがて人間そのものの生存への道を閉ざし、墓穴に向け

てアクセルを踏みつづけているのではないかという指摘を厳粛に受けとめなければならない。

今日の農業は多くの技術が導入され、省力化の中で生産も高まり、もはや20～30年前の農業、農家の面影はない。しかし狭い国土と多い人口のなかで食糧の自給率は低く、その確保は重要な課題である。

農業に対する役割は今後益々重要で多彩である。食糧の生産、国土保全、災害防止、資源確保、文化の伝承、情緒の涵養等々期待される機能は高まるばかりである。

私は農業が自然とのかかわりの中で肉体的な健康増進を期待すると共に、特に精神的、情緒の涵養を重視したいのである。豊かな物質文明のなかで私共の精神は利己的、独善的で権利の主張が強く、依存的で自立、自助の

気持が薄らぎ、連帯や協力の心も弱まってきた。

私共はいまこそ自然の中ではぐくまれ育つ生命を直視し、一人では生きられない生態系をみつめ、その尊厳と畏敬に思いをそそぐ可きだと思われる。土や太陽のぬくもりの中で農を営み、自然に感謝し、報恩の心を養い、誠実、勤勉、忍耐、努力などを習得する尊い生産活動が農業に存在するのである。

いま日本は急速な高齢化社会を迎えている。生命を如何に守り、如何に育て、老後を如何に充実させるか、農家、農村のもつ機能は都会より多くの点ですぐれていると思う。

物質中心の価値から生命中心、生物の生存秩序をふまえた行動が要求されており、その変革への道は農業の中にあり、農はまさに生命産業であると理解しているのである。